



選手の特性つかみ 世界へ

パラ五輪は特別な場所

パラ五輪は単なる国際大会とは違う特別な場所。一度参加すると「ぜひもう一度」という気持ちになり、ちよつとした「中毒」になります。出場選手は普段の国際大会でも対戦する相手ですが、五輪に合わせて技術や体調、モチベーションを最高潮に上げてきているので試合の雰囲気は一変。今回のロンドン大会もレベルが格段に上がり、ちよつとしたきつかけで簡単に状況がひっくり返るような、最後まで気が抜けない試合ばかりでした。

自身は肢体不自由者部門の代表コーチとして参加。約3週間の滞在中、試合では選手にアドバイスを行ったほか、現地の担当者との打ち合わせや本部とのやりとり、タイムテーブル管理、選手村での生活面などトータルで選手をサポートしました。

コーチよりも「便利屋」

代表コーチの立場ですが、実は卓球の専門家ではありません。普段は岡山市障害者体育センターで仕事をしています。このセンターは障がい者が優先的に使えるスポーツ施設。競技の準備や片付け、車いすの乗り降りのサポート等を行い、大会や講習会などの運営をしています。

中学から大学まで軟式テニスに取り組み、卓球の選手経験はゼロ。卓球に興味を持ったのは結婚がきっかけでした。車いす卓球選手の夫（国内第一人者の岡紀彦選手）がセンターを練習場所に使っていたことが縁となり結婚。練習相手などを務めるうちに卓球との関わりが増えていきました。技術が優れているわけではないのに代表コーチになれたのは、今までに60回ほど夫の海外遠征に同行し、知識や情報をたくさん持つていたからだと思えます。コーチというより「便利屋」という表現がぴったりでしょう。

国挙げ組織的に強化を

パラ五輪出場には世界ランキング上位に入る必要があります。2011年はロンドン大会出場をかけた重要な年だったので、7回海外遠征に同行しましたが、パラ五輪など特別な大会を除き、遠征費用はほとんど「自腹」。実力があっても費用や時間がなければ、世界ランキングに反映される大会に出場すらできません。ロンドンで感じたのは、国を挙げて障がい者スポーツを強化している国が急速に増えてきていること。日本は先進国の中でも遅れており、取り組みの差を痛感しました。資金面はもちろん、

指導者や練習環境などのフォローが必要です。外国では、健常者と障がい者のアスリートが合同でトレーニングできる施設があったり、近年急速に強くなっている中国や韓国には障がい者向けの強化施設ができたと言われます。世界の流れは、選手個人の努力だけでは太刀打ちできない状況になっています。ほとんどの選手が普段の仕事や生活と両立して競技に取り組んでいます。もっと国や協会などが選手を組織的に強化する体制にしていけることが急務です。

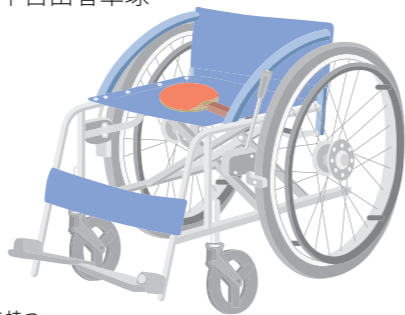
「基本」はあてはまらない

ロンドン大会を経て、選手強化には障がい特性の理解とあわせて細やかな技術指導をすることが必要だと思いました。障がい者ということでも、同じ卓球選手であっても身体や精神の状態は一人一人全く異なります。卓球の「基本」が全ての選手にあてはまるとは限りません。一人一人の選手の特性をつかみ、その特性に合った方法を見つけて指導しなければならぬのです。私が気をつけていることは、やり方を押しつけるのではなく、特性にあった方法を選手自身に気付かせてあげること。選手が悩んでいる時にこそ、一言助言ができればと思っています。

岡 博子

パラリンピック卓球日本代表コーチ × 岡山大学教育学部卒

北京に続き、ロンドン・パラ五輪に2大会連続で卓球日本代表コーチとして参加。車いす卓球の国内第一人者・岡紀彦選手と結婚。普段は岡山市障害者体育センターに勤務しながら、日本肢体不自由者卓球協会の役員も務め、幅広く障がい者のサポートを行う。



- おか ひろこ (47歳)
- ▶1965(昭和40)年 岡山県岡山市出身
 - ▶1988(昭和63)年 岡山大学教育学部卒
 - ▶1988(昭和63)年 岡山市障害者体育センターに就職
 - ▶1989(平成元年) 「障害者スポーツ指導員」初級
 - ▶1994(平成6)年 車いす卓球の国内第一人者・岡紀彦さんと結婚、卓球に興味を持つ
 - ▶2002(平成14)年 「障害者スポーツ指導員」中級
 - ▶2008(平成20)年 北京・パラ五輪に卓球日本代表コーチとして参加
 - ▶2012(平成24)年 ロンドン・パラ五輪に卓球日本代表コーチとして参加